平成27年度

宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国　　語

注　　意

1　監督者の「始め」の合図があるまでは，開いてはいけません。

2　試験時間は，板書されている時間割のとおりの50分間です。

3　問題数は大きな問題が4問で，表紙を除いて10ページです。 四 は記述問題です。

4　解答用紙は2枚で，答え方はマークシート方式と記述式です。

5　監督者の指示にしたがって，試験開始前に受験番号と氏名をマークシート解答用紙のきめられた欄に書き，さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。

6　監督者の指示にしたがって，試験開始前に受験番号と氏名を記述用解答用紙のきめられた欄に書き，さらにバーコードシールをきめられた枠の中に貼りなさい。

7　答えは，それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって，ていねいに記入しなさい。

8　試験中に質問があれば，手をあげて監督者に聞きなさい。

9　監督者の「やめ」の合図があったら，すぐやめて，鉛筆をおきなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

おかしなことを言うようだが、現代の言霊信仰[注1]は、だれもが言葉によって籠絡[注2]されていながら、同時に言葉をとるにたりぬものと考えるところに成立している。逆に言うならば、個々の言葉や個々の言いまわしは、いちいち気にするほどのものではなくとも、寄り集まって大河となれば、世の大勢を牛耳る[注3]ほどの霊力を発揮するようになるのである。そうなれば、論理的な反論など、ほとんど無力と覚悟すべきであるだろう。そもそも、個々の言葉は、だれもが「たかが言葉」と見すごすようになっていたはずだからである。

（　a　）、言霊の魔術的なメカニズムは、たくみな商業戦略をつうじて人々の間に浸透する。「今は〜〜の時代と言われている」「目下、〜〜がブームだそうで」……これらは、誰[だれ]がそう言っているのかを巧妙にかくしたまま用いられる便利な言葉であり、そのくり返しが、時代のトレンド（流行）をつくりあげる。子供たちは言うだろう。「ママ、ケータイ買ってよ」「どうして」「①みんな持っているから」。サラリーマンは言うだろう。「きみ最近評判わるいぞ」「誰から？」「②みんなからだよ」。この「みんな」もまた、本当にみんなかどうかはわからない。〔　Ⅰ　〕

こうした傾向のなかで、ある種の価値観をしのびこませながら、さまざまな欲望が刺激される。「〇〇洗剤でまっ白ソフト」「明るい家庭は××ホーム」。かくして、明るく清潔な生活が求められ、ネクラは嫌われ、三K（きつい・きたない・きけん）職場は敬遠されることになる。

そのようにして刺激された③商取引の場面では、大量消費とその効率化にともなう接客術的言語が満ちあふれ、マニュアル風の物言いに、むしろ人間性の方が追随するようになってくる。あの空港係官の血のかよわぬ言葉もまた、やはりこうした効率化の一端をになうものにほかならない。なるほど、デパートの売り子さんも、ファースト・フードの店員さんも、あの係官よりはていねいかもしれないが、血のかよっていないことでは［　※　］である。たとえば、東京ディズニーランドのマニュアルは、新人アルバイトに、④「考えている印象を与えるよう、一度だけほおに手を当てる」ことを教えているという。デパートのエスカレーターのところに流れているあの「お子様は手をつないで中央に……」というアナウンスもまた、いかにも客の身を案じる措置のように見えながら、実際はデパート側の、安全管理をしているというアリバイ工作[注4]の一環をなしてもいる。実のところ、これはさるデパートの管理部長さんから直接聞いた話なのである。「いやあ、あれが要らないということは、私どもにも重々わかってはいるんですがね。流しておかないと、万一事故がおこった場合に、こちらの責任が問われるんですよ」。〔　Ⅱ　〕

さて、こうした安全対策や広報の領域でこそ、言霊の機能は存分に発揮されることになる。ここにおいて言葉は、多くの場合、「〜〜しましょう」というソフトな管理の姿勢を取ってくる。いわく、「投票に出かけましょう」。為政者や管理者のこのような物言いは、そのまま、教育者のものでもある。「先生の言うことをよく聞きましょう」。

やがてこのスタイルは、社会生活のすみずみにまで反映されてゆく。「ゴミは決められた日に出しましょう」云々。これはまた先ほどの「今は〜〜の時代と言われている」などと同じく、誰が言っているのかわからないままに、かなりの力で、わが同胞の行動を規制しているように思われる。

（　b　）、そうした言葉は、まさしく言の葉として、類似表現の枝葉を広げてゆく。「〜〜という意見がもっぱらである」⑤から始まり、「〜〜することが望ましい」を経て、若者むけガイドブックに特徴的な「〜〜であるのがうれしい」⑥にいたるまで、管理主体をぼかすような言いまわしが社会に蔓延するのである。つまるところ、巷にとびかっていたスローガンは、（　c　）、こうしたソフトな管理の言霊を、いたるところで反復するものだったのではあるまいか。そのようにして、わが国では、管理が網の目のように大衆社会のなかに入りこみ、主体のない言霊を介して、だれもが管理されながら、同時に他人を管理するような植物状のメカニズムが、すっかり国土をおおってしまっているように見える。

〔Ⅲ〕朝礼、訓示、社歌斉唱、さまざまな儀式、それに加えて管理の言霊、と、内面指導が好きな日本人は、皮肉なことに典型的な外部指向型の精神構造をつくり出してしまう。わが国の子供たちのしつけを見ても、「そんなことしていると、おじさんに叱られるよ」という形で、外部からの制裁によってなされているのであり、「それはしてはいけないことだ」「お母さんは、いけないことだと思う」と教えて、主体的な価値観を持たせようとするものではない。

こうした管理社会は、異質のものが排除され、社会全体が均質化して活力を失ってしまうのが特徴だが、そうならないためには、つねに小さな差異をつくり出して競争をあおり、目新しい情報を提供する必要がある。学校や企業のランキングがなされ、情報のカタログ化がおこなわれ、だれもが、どこの学校の偏差値が高いだの、どこの店がうまいだのと、瑣末（注5）な話題に明け暮れる。まさにファッショナブルに事はすすんでゆくのである。

情報は洪水のようにおしよせるが、こうした⑦生産的でない情報がいくらあっても、周囲の世界はいっこうに見えてはこない。内的な価値観を確立できないままに、情報だけはふえてゆくため、さしあたり、他人が意味づけしたものを受動的にうけ入れるしかなくなってくる。こうして情報は、あの蔓延する言霊のように騒音的なものとなり、人々は、自分自身の判断も、自分自身の言葉をも、失ってゆかざるをえない。

〔Ⅳ〕言うならばこれは、情報の過剰によって失われてゆく言語を、当の情報によって取りもどそうという試みであり、人間が自分に合った言語を見いだせなくなるのなら、（　d　）、言語に合った人間をつくり出してしまおうという試みなのである。

（加賀野井秀一「日本語の復権」から）

（注1）言霊＝古代日本で言葉に宿っていると信じられていた不思議な力。発した言葉どおりの結果を現す力があるとされた。

（注２）籠絡（ろうらく）＝思いどおりにあやつること
（注３）牛耳（ぎゅうじ）る＝団体や組織を支配し、思いのままに動かすこと
（注４）アリバイ工作＝証拠をあらかじめつくっておく作業
（注５）瑣末（さまつ）な話題＝とるにたりない話

問一　（　**a**　）から（　**d**　）に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア［**a** 実は　**b** まず　**c** いっそ　**d** さらに］
イ［**a** まず　**b** さらに　**c** 実は　**d** いっそ］
ウ［**a** さらに　**b** いっそ　**c** まず　**d** 実は］
エ［**a** いっそ　**b** 実は　**c** さらに　**d** まず］

問二　①「みんな持っているから」、②「みんなからだよ」とあるが、これらに共通する「みんな」の説明として適当なものはどれか。

ア　時代のトレンドをつくりあげようとしている言葉
イ　責任を逃れようとする言葉
ウ　他の人々と同じであることに安心感を抱こうとする言葉
エ　主体的な判断を隠そうとする言葉

問三　次の文章が入るところは、本文中の〔　**Ⅰ**　〕から〔　**Ⅳ**　〕のどこか。適当なものを後から選べ。

ここにこそ、マニュアル言語が登場してくる最大の理由がある。

ア　〔　**Ⅰ**　〕　**イ**　〔　**Ⅱ**　〕　**ウ**　〔　**Ⅲ**　〕　**エ**　〔　**Ⅳ**　〕

問四　③商取引の場面とあるが、ここではどのようなことが起こっていると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次から選べ。

ア　企業が発信する情報によって、「〇〇は充実した私生活を手に入れるために必要な商品だ」と人々を洗脳している。
イ　企業の接客術的言語によって、人々は「〇〇がブームだから乗り遅れないように」というような強迫観念にとらわれている。
ウ　くり返される企業側のたくみな言葉の力によって、人々にある種の価値観を植えつけ、購買意欲をかきたてている。
エ　個人の主体的な価値観が重視される現代の言霊信仰によって、人々は大量消費活動へといざなわれている。

問五 ※ に入る語として適当なものはどれか。

ア 海千山千　**イ** 本末転倒

ウ 満身創痍（そうい）　**エ** 五十歩百歩

問六 ④「考えている印象を与えるよう、一度だけほおに手を当てる」とあるが、その理由として最も適当なものはどれか。

ア 万一の事態に備えてソフトな管理体制に非難が向かないようにするため

イ マニュアル化されたサービスを活用し、親身になっていることを伝えるため

ウ 人間味にあふれた接客をしているかのように演出しようとするため

エ ソフトな管理の姿勢によって広報面を強化し、企業側の真剣さをアピールしようとするため

問七 ⑤もっぱら、⑥蔓延するの本文中での意味の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア ［⑤ 主　⑥ のび広がる］

イ ［⑤ 重大　⑥ はびこる］

ウ ［⑤ 想定内　⑥ 勢力を増す］

エ ［⑤ 一般的　⑥ 威力を持つ］

問八 ⑦生産的でない情報とあるが、「管理社会」の中では「情報」が「生産的」なものにならない理由として最も適当なものはどれか。

ア 個人の主体的な価値観を形成しないから

イ 学校や企業にランクをつけることで、外部指向型の精神構造を作りあげているから

ウ 異質なものまでうけ入れようとするから

エ 小さな差異にのみ注目させ、社会全体をとらえようとする人々の姿勢を奪ってしまうから

問九 本文の中で述べられている内容と合うものはどれか。

ア 現代の人々はくり返される言語によってソフトに管理され、行動を規制されている。

イ 日本人は内面指導に重きを置くため、外部に依存するような精神構造には否定的である。

ウ 現代の管理社会の特徴は、小さな差異から自分に合った言語を見いだすことを重視している。

エ 言葉を「たかが言葉」としてとらえるような受動的な姿勢こそが、現代の言霊信仰の正体である。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

修業式の五日ほど前に、祖母が息をひきとった。持病はなかったから、つまり老衰死である。その死に顔も、また死そのものとの接触感も、ともに少年の意識にのぼらなかった。父がおいおい手ばなしで、まるで子供のように泣きながら家の中をうろうろしているのを、少年は何か不思議な観物（みもの）を見るように眺めた。お別れに、割箸（わりばし）の先へつけたガーゼで祖母の口をふかされた時にも、土色にすぼまって開いている老女のしなびきった唇は、みにくいと感じただけに過ぎない。もう一つ、そんな醜いものを半公開の儀式にまで仕立てる大人たちの愚かさに、へんな軽蔑（けいべつ）の情をおぼえただけにすぎない。少年は、①むしろ祖母に同情した。彼女の死への同情ではなかったけれど。〔　Ⅰ　〕

そんな少年にとって、もし②何か死の実感に似たものがあったとすれば、それは祖母の死ぬ日の朝から（臨終は夕方だった）、近所の大きな黒犬が庭へまぎれこんで来て、前脚を縁側にかけながらしきりに遠吠（とおぼ）えしたことである。いくら追われても水をぶっかけられても、犬は出て行かなかった。ますます牙（きば）をむき出し吠えさかった。少年は、いよいよ祖母が息を引きとったあとで、あの犬が見ていた何か人間の目には見えぬものが、つまり死なのだと思った。

葬列も葬式も、あらゆる大人たちのする儀礼の例にもれず、長たらしく退屈な、無意味な行事の連続にすぎなかった。少年は南国の春の砂ぼこりの中に、小さな紋付羽織（注）を着せられて、みじめなさらし者にされている自分だけを意識していた。③腹だたしく口惜しかった。

少年は、あの吠えさかる犬が目に見ていたものが死なのだと、漠然と感じてはいたけれど、これには（　a　）、想像のへだてとでも言うべき④一皮かぶった気持ちがあった。少年が祖母の死を、はっきりと現実として受けとったのは、いよいよ修業式が済んで、小さな免状と大きな優等証書の二枚を筒巻きにして、ぼんやり家に帰って来たあとである。〔　Ⅱ　〕父は役所だった。家には母だけがいて、その筒巻きを手にすると、ちょっと広げてみて、「そう」と、ニコリともせず、呟（つぶや）くように言った。そして、また巻いて、父の机の上に置いた。

少年はもちろん、ほめられようと思って帰ってきたわけではない。だいいち少年自身にしてからが、その日のことをさっぱり嬉（うれ）しいとも思ってはいない。勝ち気で、無口で、そのくせ胸の奥に何か少年には窺（うかが）い知ることのできない情愛や智恵を、じっと包みこんでいるような母の性格も、少年はたしかに心のどこかで愛してはいるのだが、その一方やはり、⑤その母に、一種の嫌悪（けんお）と反発を、たえず感じずにはいられなかった。自分自身の影に、無限に愛情を感じる人もあれば、無限の嫌悪をいだく人もある。その中間の人は極めて珍しい。少年は明らかに後者の型だった。少年は母のなかに、自分の影を嗅（か）ぎつけていたのである。……そんな母から少年は「そう」と

いう呟きのあとに「よかったね」という言葉がくわわることを、最初から予期していたわけではない。（　b　）その日だけは、何か無性に、それに類する慰めの一言が欲しかった。少年は疲れていたのかも知れない。〔 Ⅲ 〕死や葬式や修業式が、立て続けに続いたのである。少年は甘えたかった。ほんの少し、ただ、ほんの少し。……

少年は自分の勉強机の前へ行って、ゆっくり袴の紐をときながら、ふと祖母のいない空虚さを焼けつくように頭の一隅に感じた。祖母ならば「よかったのう」と言ってくれるばかりか、痩せ細ったカサカサの手で、頭を撫でたり、なにかその辺をごそごそいわせて、褒美を出してくれ、撫でられたり、褒美をもらってうれしそうな顔をつくろうのは、少年にとって迷惑なことだったが、それをしてくれる人は、五日ほど前から、突然いなくなったのだ。あの隠居部屋には、たしかに誰もいないのだ。〔 Ⅳ 〕

そうした少年のこころの動きは、祖母への追慕などというものとはおよそ縁のない裏腹なものに違いなかった。そこには一種の自責の念が、黒々とよどんでいた。祖母は……あんなにも自分が甘えぬき同時にまた避けぬいた祖母は、自分から何の感謝のしるしも受けとらずに、黙って死んでいったのだ。この取り返しのつかないものが、（　c　）「死」なのだ。

少年はこの空虚と自分への怒りとに、どうにも堪えられなくなって、縁側に寝そべったまま、ふと口に出してみた。

⑥「母さん……お祖母さんは？」

「え？」

座敷の暗いところで、何か片づけ物をしていた母は、⑦怪訝そうに少年を見た。（　d　）、哀れむようにじっと見つめた眼を、またよそへそらした。

⑧少年はその瞬間、しまった、と思った。ちらりと目にうつった母の眼のうるみのなかに、少年は明らかな誤解の影をとらえたのである。

「ううん。そうじゃないの……」と、少年は打ち消そうとして、言葉につまった。

「何が？」

母は小声で聞き返して、また哀れむように少年を見た。

（神西清「少年」から）

（注）紋付羽織＝改まった席で着る和装

問一 ①むしろ祖母に同情した。とあるが、その説明として適当なものはどれか。

ア 子供のように泣いた父や祖母の死を儀式の対象にせざるをえない大人たちにも同情したが、それ以上にいきなり死を迎えた祖母を気の毒に感じた。

イ 祖母のみにくい姿を観物を見るように眺めている自分にいらだちを感じながらも、それ以上に祖母の死に対する家族の対応の仕方に嫌悪を感じている。

ウ 死んだ祖母に対する追慕の気持ちもあったが、それよりも祖母を半公開の儀式に仕立て上げた大人たちへの軽蔑の情を強く感じている。

エ 祖母の死にも、父の悲しみ方にも心を動かされなかったが、それよりも醜い姿を儀式の対象にされなければならなかった祖母を哀れに感じた。

問二 次の文章が入るところは、本文の〔 Ⅰ 〕から〔 Ⅳ 〕のどこか、適当なものを後から選べ。

……この不在の感覚が、痛いほど少年をしめつけた。

ア 〔 Ⅰ 〕 **イ** 〔 Ⅱ 〕 **ウ** 〔 Ⅲ 〕 **エ** 〔 Ⅳ 〕

問三 ②何か死の実感に似たものとあるが、その時「少年」が感じ取ったものとして適当なものはどれか。

ア 庭にまぎれこんで来た犬の黒い色に象徴されていた、少年から祖母を奪い去っていった死という不吉な存在

イ 遠吠えをし、追われても吠えさかる犬がとらえていた、目に見えない死というものの確かな存在

ウ いくら追われても、水をかけられても出て行こうとしない犬のような、死というものの執念深さ

エ 牙をむき出して吠えさかる犬のように、祖母に襲いかかる死の凶暴さ

問四 ③腹だたしく口惜しかった。とあるが、これは何に対して抱いた感情か。その説明として適当なものを次から選べ。

ア 大人たちにされるがままに、無意味な儀式に参列している自分に対して抱いた感情

イ まるで「少年」を見下したように、牙をむき出しにして吠えさかる黒い犬に対して抱いた感情

ウ 自分の心のよりどころであった祖母を奪い取り、自分を孤立させた死に対して抱いた感情

エ 甘えるだけ甘えて、祖母に何の恩返しもせずに身勝手な態度をとってきた自分に対して抱いた感情

問五 （ a ）から（ d ）に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア [a もちろん b しかし c つまり d そして]

イ [a しかし b もちろん c そして d つまり]

ウ [a つまり b そして c もちろん d しかし]

エ [a そして b つまり c しかし d もちろん]

問六 ④一皮かぶった、⑦怪訝そうにの本文中での意味の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア ［④うわべばかりの　⑦心配そうに　］
イ ［④まったく見当違いな　⑦うたぐり深そうに］
ウ ［④じかに感じ取れない　⑦不思議そうに　］
エ ［④うすっぺらな　⑦気の毒そうに　］

問七 ⑤その母に、……感じずにはいられなかった。とあるが、その時の「少年」の気持ちの説明として適当なものはどれか。

ア 甘えたいと思っている自分の心を見透かしたように黙っている母に、大人の冷たさを感じとっている。
イ 率直に愛情を示さない母の中に、素直でない自分の性格と似たものを感じとっている。
ウ 率直に愛情を示さず、甘えることも許さない母の態度に不満を感じている。
エ 母の愛情を認めながらも、優しかった祖母と比べるとどうしても自分の中で母を受け入れらないと感じている。

問八 ⑥「母さん……お祖母さんは？」とあるが、その時の「少年」の様子として適当なものはどれか。

ア 頭では理解できていても、祖母の死を認めたくないという思いから、つい祖母のことを口に出してしまった。
イ 祖母を避けていたことへの自責の念に堪えられず、思わず祖母のことを口にした。
ウ 冷淡な母よりも祖母を求めているのだということを母に印象づけようとして、わざと祖母のことを口にした。
エ 祖母を失った心の穴を埋めることができず、追慕のあまりふと祖母のことを口に出してしまった。

問九 ⑧少年はその瞬間、しまった、と思った。とあるが、その理由として最も適当なものはどれか。

ア 反発し、敵対していた母に自分の弱みを握られてしまったと思ったから
イ 自分が表面的には祖母を慕いながらも実は祖母を避けていたことを、母に気づかれてしまったと思ったから
ウ 自分が祖母の愛情を求めているのだと、母に勘違いされたと思ったから
エ 祖母を忘れようとしていた母に、亡（な）き祖母のことを思い出させてしまったと思ったから

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

孟宗（注1）は、いとけなくして父におくれ(a)、一人の母を養へり。母年老いて、つねに病みいたはり、食の味はひも、度ごとに変はりければ、①＿＿＿よしなきものを望めり。冬のことなるに、竹の子を欲しく思へり。すなはち、孟宗、竹林に行き求むれども、雪深き折なれば、などかたやすく得（トウシテ容易ニ手ニ入レラレヨウカ）べき。②＿＿＿「ひとへに、天道（注2）の御あはれみを頼み奉る」とて、祈りをかけて、③＿＿＿おほきに悲しみ、竹に寄り添ひけるところに、にはかに(b)大地開けて、④＿＿＿竹の子あまた生ひ出で侍りける。

（「二十四孝」から）

（注1）孟宗＝中国三国時代の呉の大臣で、孟宗竹の名前の由来になっている人物

（注2）天道＝天地を主宰する神

問一

(1) (a)おくれ、(b)にはかにの本文中での意味はそれぞれどれか。

(a)おくれ

ア 捨てられ　**イ** さとされ　**ウ** 先立たれ　**エ** だまされ

(2) (b)にはかに

ア おごそかに　**イ** 大きく　**ウ** ゆっくり　**エ** 突然

問二 ①＿＿＿よしなきものの説明として適当なものはどれか。

ア 今までは縁もなかったもの
イ とるにたりないようなもの
ウ いつもなら口にしないもの
エ 手に入れる方法がないもの

問三 ②＿＿＿べきの活用形はどれか。

ア 連用形　**イ** 連体形　**ウ** 已然形　**エ** 終止形

問四 ③＿＿＿おほきに悲しみ、の理由として最も適当なものはどれか。

ア 「天道」には「母」の病気を治せないとわかっているから
イ 「母」にふりまわされることが耐えられなくなったから
ウ 「母」の望みを叶えてあげられそうにないから
エ 「雪」をかき分けてこれ以上進むことは困難であるから

問五 ④＿＿＿竹の子……侍りける。の理由として適当なものはどれか。

ア 「孟宗」の孝心に「天道」が感心したから
イ 「母」の信仰心に「天道」が感動したから
ウ 「竹林」の「雪」が「孟宗」の涙で溶けたから
エ 「孟宗」の苦しみが「竹」に伝わったから

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

最近、松尾（まつお）[1]自身の書いた『おくのほそ道』自筆本が発見された。

本は思ったより小ぶりだ。一辺が一五センチほどの正方形の和紙に、ほそめの筆で流れるように書きはじめられている。文面はいたって鮮明で、①とても三〇〇年以上も前にしたためられたものとは思えない。墨を足すごとに、いったん濃くなった文字が、次第にうすくなっていく。その濃淡の(a)起伏には、音楽的なリズムさえ感じられる。よく見ると、冒頭行の「にして行かふ」は、目立たない貼（は）り紙の上に書いてある。「にして立帰」を書きかえたのだ。そのさりげない貼り紙といい、こまやかで整然とした(b)筆致といい、芭蕉がいかに几帳面（きちょうめん）で、しかも精緻（せいち）な感性の持ち主だったかがうかがい知れる。

今、私は[1]の筆致を「[2]」にたとえた。実は彼の俳句自体も、音をともなっている。それは句の中身だけでなく、その発音にも投影している。声を出して読んでみると、そのことが一層よくわかる。例えば、②「さみだれをあつめて早し最上川（もがみがわ）」で、この句には母音〔a〕が集中し、それはごうごうたる川音、その流れの速さ、それでいてさわやかな新緑の景色を印象づける。

これに対し「静かさや岩に染み入る蝉（せみ）の声」では、母音〔i〕が主体で、蝉の鳴き声の「ミーン」とか「ジー」という③オノマトペと連動する。その蝉の声があたりの(c)静寂を一層ひきたてている。

（水野信男（みずの のぶお）「地球音楽紀行　音の風景」から）

問一 (a)起伏、(b)筆致、(c)静寂の読みをひらがなで書きなさい。

問二 [1]に共通して入る名前をひらがな四字で答えなさい。

問三 ①とてもと同じ品詞は、これ以外に、同じ段落にいくつあるか。漢数字で答えなさい。

問四 [2]に入る言葉を、本文中から七字で抜き出しなさい。

問五 ②「さみだれをあつめて早し最上川」の句の季語を句中から抜き出し、また、その季節を漢字一字で答えなさい。

問六 ③オノマトペとは、ある表現技法を意味する外来語である。ここでの、その表現技法を漢字で答えなさい。